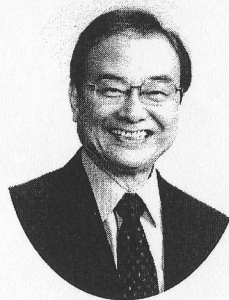


小学校四年生の筆者、自宅にて。

小学生時代には「進め少国民、^{はっらっ}潑刺と元気よく」や「君たちが大きくなる頃に、日本は大きくなっている」という歌を元気良く、よく歌っていた。しかし、「潑刺と元気の良い」僕ら子どもたちが、アメリカとの戦争が始まると、何かがどこかおかしいと感じることが多くなった。その大きな理由のひとつは、どんどん「もの」がなくなっていく日々の暮らしにあった。

僕たちがおやつによく食べていた大好きなおせんべいも、飴も、チョコレートも、



幸せなら「平和」を態度に示そう

——ある軍国少年のストーリー

木村 利人^{りひと}

「欲しがりません、勝つまでは」の暮らし

僕はその当時、東京の靖国神社のそばにある東郷尋常小学校（現、九段小学校）の二年生だった（一九四一年から、小学校の呼び名が国民学校に変更になった）。

一九四一年（昭和十六年）十二月八日の朝、いつものように、庭続きにあった伯父の家に朝ごはんを食べに行った時、朝七時の「臨時ニュースを申しあげます」というラジオ放送で、真珠湾攻撃で大戦果をあげたとのニュースを聞いた。僕は本当に嬉しくなった。

しかし、ついに日本がアメリカに「宣戦布告」をしたというニュースを一緒に耳にし

ていた伯父はすぐに、「バカなことだ、日本もこれでおしまいだ。日本は必ず負ける」と言った。

アメリカのシカゴ大学に留学して医学を学んだ伯父には、アメリカの国力がよくわかっていたので。ところが僕は、これを聞いて伯父は間違っていると思った。学校の先生や大人たちの言っていたことと矛盾していたからだ。しかし、実際には伯父の言ったように、日本は完全に負けてしまった。

小学生時代には「進め少国民、^{はっらっ}潑刺と元気よく」や「君たちが大きくなる頃に、日本

は大きくなっている」という歌を元気良く、よく歌っていた。しかし、「潑刺と元気の良い」僕ら子どもたちが、アメリカとの戦争が始まると、何かがどこかおかしいと感じることが多くなった。その大きな理由のひとつは、どんどん「もの」がなくなっていく日々の暮らしにあった。

僕たちがおやつによく食べていた大好きなおせんべいも、飴も、チョコレートも、